

を盡して、好い水とほめる。十三年前私がエルサレムからナブルスを経て、馬でサマリアの山路を此ゼノンに来て、一夜を獨逸のホテルに明かした時、丁度十四夜の月に、水に集ふ人影、牛馬驢馬の影が影畫の様に見えた其水の流れは、矢張此れであつた。

滾滾と湧いて流るる 棕櫚の村
ゼノンの水をまた 掬びつつ

其時私が泊つた獨逸のホテルは、此清水から近く、見晴らしの好い高處にあつて、其 yard はすべてコンクリイトであつた。其頃はあたりには然る可き建物もなかつた。今は家など多く出来て、當年のホテルを何れと一寸見惑ふたが、私共の馬車に群がる村人の中の英語を話す赤帽に問へば、矢張當面の高い建物が以前のホテルで今は知事の官廳に使はれて居ると云ふ事である。知事と云ふのは英吉利嫌ひの埃及獸醫もほめて居た其人であらう。其書記のシリア人 Kharry 兄妹は、ナザレで會ふた。ナブルスに行く時寄るかも知れぬと云ふて置いたを思ひ出し、名刺を持たしてやると、兄は不在で、妹が出て來た。母も居るから、珈琲でも、と云ふ。下りるも面倒だし、馬車の上下で少し話して、別れる。R 女は入つて往つたが、やがて叔父に宛てた一通の郵便を持って來て、ナブルスに往つたら出してくれと頼む。妻は小さな扇を彼女にやつた。

黒い三方眼鏡をかけた赤帽の五十男をナブルスまで便乗さして

くれぬか、と先刻の英語を話す赤帽が取次ぐ。荷物は？無い。一人？一人。それでは馭者座に乗つても構はぬ。賃は？不用。黒眼鏡は喜んで乗つた。

(二)

十時半、馬車はゼノンを後にする。村はづれ、路傍を潺湲と流るるのが、先刻飲んだ水の上流である。源泉は近くにあるさうだ。此前馬で通つたカバチエエを遙左手に見て、土耳其政府の造つた今は放棄されて居る鐵道線路に傍ひつ、離れつ、蹄先上りに駛しる。海の方から涼しい風が吹く。十三年前の暑い午后、嬉しいものに思ふたドタンの泉は、適に縁一堆の森をそれぞ、と馬車の上から眺めて過ぎる。

路 山をめぐれば 縁の いちじるく
ドタンの 森も 指さされつつ

日も午を過ぐるので、ナザレから持參の新聞包を開いた。パンに熟卵、干無花果。羊肉は馭者座の人人に譲る。黒眼鏡は食はず、馭者が貪り食ふた。それで味を占めたと見え、水を飲ましてくれ、と勝手に私共の魔法瓶を引寄せるので、飲水などは其方で用意して來べき筈、と眼顔で叱つて、然し一杯を限つて與へる。

道は段々上りになる。新に小石を敷いた處に来る毎、男共は馬車を下りる。午の日熱く、赤帽君は蝙蝠をさす。午後一時、山腹の小さな村シイレエに來た。而して泉に近い小家の前、無花果の樹蔭涼しい處に馬車は駐まつた。此處は此前私がナブルスから馬で來て、晝休みをした村である。泉のほとりは茶店一軒で、村は道よりも低い處に點として居る。此山の村の生命の水は、上手の山懐からちよろちよろ落ちて來るのを、一方を打缺いた石棺を其まき水槽にして受けてある。甕を持った女達や子供が、群がつて居る。女達は木の棒でとんとたたいて洗濯をしたり、おしやべりをしたり、悠悠と遊んで居る。馭者は自分の瓶を取り出し、汲みに往つた。私共が下りて、水筒を持つて行くと、女達が傍寄つてくれたので、會釋して汲むで馬車に歸る。

赤い病眼を黒眼鏡に隠した赤帽は、小家に入つて往つたが、やがて家の裏手に出て、風呂敷様のものを敷き、起つたり、跪いたり、回教式の禮拜をなし始めた。

店には小さな綠林檎を賣つて居る。先刻の訛の心か、馭者は五六個を私共に持つて來てくれた。勿論酸い。やがて赤帽はそれを大きなスヅクの袋一つ買つて馬車に持込み、私共に有難迷惑の其酸い林檎を三十個もくれた、禮心に。此前の旅行には、案内者が杏を買つて來てくれたが、私は腹が悪いらで喰はなかつた。今度は杏がなくて、酸い林檎だ。無花果はまだ小さい。

水汲女の氣永さ。來早々盥たした甕を地に置いて、それが午下

の日に好い加減湯になるまで長話して居る。果ては、折角汲むだ甕を、また打ちあけて、新しく汲むで行くのもある。私共の馬車は、その連中が幾かわりするまで、二時間近くも長休みして、三時過ぎやつと茶屋をはなれる。泉を過ぎて、少し行くと、矮く太い無花果が綠縁と枝を廣げて居る。あの蔭に十三年前晝寝したのだ、と妻に指して語る。

十三年の昔 憩ひし シイレエの

無花果の 蔭を 妻に 指さす

* * *

サマリアの いちぢくの かげの 深みどり

縁 いやませ 旅人の ため

シイレエの 泉の ほとり 馬車 とめて

サマリア女 水くむを 見る

あ い

シイレエの山村を過ぐると、やがて峠に來た。好い見晴らしである。西には、地中海が光る。過ぎ越し方は、山山を見越して、エスドレの野の一部が望まれる。行く手は、サマリアの山又山。處處には、あんな所にと思ふ高い處に、村がある。海の風が吹いて、馬車の上が涼しい。

峠を過ぎて、下りになる。峡谷がある。追々放棄された鐵道線路に出る。馭者は時に道を間違へては、黒眼鏡に教はつて引返へしたりして行く。昔のサマリア—セバステエの跡を遠目に見て、馬車は東南にナブルスを指して行く。谷間の道が長い、長い。日も追々傾いて、馬車の影が長くなつた。今朝ナザレを立つて、日本里數二十里近い野道山路に、人は困じ、馬は全く疲れ果て、時々はびたりと足を駐める。馭者の鞭が鳴ると、がたがたと駈け出し、また直ぐ並足になり、果ては全く駐まつて了ふ。

(三)

それでも追々里近くなる。水泳がある。木立がある。麥や野菜の畑がある。

ナブルスは、昔のセケム。南に海拔2386呎のゲリジム山、北にエバル海拔3032呎の山の其間の細長い谷にあつて、邑も海拔1870呎の高さを有つて居るが、前後の山が覺つて居るので、低い谷底の氣もちがある。馬車はエバル山下から、谷川の橋を渡つて、ナブルスの邑を少し後戻りする。黒眼鏡は、唯有る角で馬車を下り、私共に挨拶し、馭者には五十錢銀貨の一片を與へて去つた。馬車は、猶後戻りをつづけ、邑の端近く、花など入口に植ゑた、小高い建物の下に駐まつた。私共の宿と指して來た Hotel Samaria である。

むつつりした年長の赤帽が、室に導く。それは Bed が四個も

並んだ、天井が穹窿になつた、僧院見たやうな室であつた。西の窓から、今まさに紅く大きく落つる日が望まれた。北は崖になつて、柘榴や無花果などが次第低に茂つて居る。そこには、水の流れがありさう。

荷物など運び込んで來た馭者に、馬車賃 600 p 拂ひ、更に骨折 30 p を與へる。喜んで、エルサレムまで往かうと云ふ。明日はナブルス泊り、と云ふて、歸へす。

宿は土人の經營である。私共の他には、客らしい客もなささう。擬紅玉の指環などはめた十四五の赤帽の子が來て、いささかの英語で、通辯の用を足す。宿の息子であつた。

トマト胡瓜のサラダとパンで、夕食を済ます。菓物は無いが。明日でなければ、といふ。

土人流の W. C. 瓢箪形に穴をくつてあるのが、面白い。

十二時間の馬車に疲れ過ぎたか、Bed に上つたが、寝つかれぬ。然し涼しい好い夜である。ナブルスは、水多い谷。泉の數が、二十二に及ぶ。枕につくと、珍らしく蛙が鳴き、水鶏が鳴く。流るる水の音がする。雨かと思ふて、わざわざ起きて窓から覗くと、千萬の螢が飛ぶやうな星の空。

水の音に 雨を 疑ふ 屋月夜

水鶏 鳴くなり 蛙 まじりに

ナブルスの 緑の谷の 夜は ふけて

無花果 がくれ 水鶏 鳴くなり

其 二 ナブルスの一日

(一)

五月三十一日。今朝は、馬車でヤコブの井に住つて見る。子供の Kaleel と、それから土人のガイドで英語を話す Kirren と云ふのが、案内する。

昨日の橋を渡る。エバル山下は鐵道通じ、然る可き建物が種々高低して居る。墓地を通る。龍舌蘭に似た植物が、一丈餘の花梗を抽いで 堂堂と花咲いて居る。壽命は、八九年と云ふ。

しばらく石ころ路を東に駛つて、ヤコブの井に來た。十三年前の六月、私が來た時は、井そのものに屋根はあつたが、あたりはかやつり草などが雜々と生へ茂つて居た。今日來て見れば、四周は塀の圍も嚴重に、可なり大きな規模の會堂が建築半ばで、井其ものは薄暗い建物の中にとりこめて居る。其かわり、此前はヤコブの井は水涸れて、井の底に小石がごろごろして居たが、今は清水が満々と溢へて居る。一人の Monk が、私共の爲に一釣瓶汲むでくれた。好い水である。皆飲むで、持參の魔法瓶にその水を盈たした。monkが蠟燭をつり下げて、井底を見せる。水面迄の深さ三十二米突、水深十米突、水面直徑三米突さうな。蠟燭が水近く下りると、黒い井底

に忽ち金環蝕の日の様な金環がかがやく。

その昔 潤れ果て たりし ヤコブの井に
水湧き 満てり 活ける 水満てり
燭を 下ろせば 深水の 面に 金環の
光 かがやく ヤコブの 古井

繪葉書を買ひ、僧に禮して、今度は構内の一室で、他の monk から珈琲の馳走になる。皆露西亞僧、希臘派の。戦争で、會堂の建築も中止のままと云ふ。其礎石や鋪石の間に咲いた緋の芥子、春菊の花など摘むて、出る。橄欖樹を植ゑた一區の地がある。其處には、二本の十字架が、獨逸兵士二名の死を語つて居る。日附を見ると、昨年六月。同行の Kirreh 君は、耶蘇信者だが、土耳其政府に強要されて、兵士に出て居た。然し勿論闘志があつたわけでもなく、英吉利人が來ると、他の仲間と皆悦んで降つたのである。ナブルスが英吉利の手に落ちたのは、昨年九月であつた。子供の Kaleel なども、戦争を見たと云ふ。Kirreh 君は、土人の基督信者と先日も此處に來て、祈禱會をしたさうな。橄欖の樹に、犬が一匹繫がれて居るのが、私共を迎へて頻に尾を振る。

(二)

私共は、ヤコブの井から、麥畑の中を、所謂ヨセフの墳に往つた。門がしまつて居るので、外から眺めて去る。

ナブルスの人口は、三萬足らず。戦争前は、橄欖油から製する石鹼の工場が澤山にあつて、可なり殷富な邑であつた。此前、私はナブルスに馬で來て、ある尼寺に一夜を明かした。其話をすると、邑に入つてあるしまつた扉の前を過ぐる時、此れでせう、と K 君が云ふ。多分それであらう。入つては見なかつた。

K 君が頻にすすめるので、私共はホテル前で馬車を下りると、徒歩巷を上つて、サマリタン教會を見に行く。猶太人は世界に散つて居るが、サマリア教會員は唯此ナブルスだけで、世界唯一無二、と K 君は云ふ。

K 君の先導で、狭い鋪石の巷を、迷宮に入るやうに、潜り潜り、上り上りして、祭司長の小さな家來た。祭司の長は Isik と云ひ、鬚髯堂堂たる五十男で、家居の服をして、煙草を吸ふて居た。二度も英吉利に往つたさうだ。珍奇な見世物として招かれて往つたのである。K 君の通辯で、少し話す。猶太人と異なり、サマリア教徒は、舊約聖書の中で唯最初の五卷を信ずる。摩西は最大の預言者で、メシアが出て、摩西以上ではない、と謂ふ。猶太人が頑固なら、サマリア教徒はその上の固陋な連中だ。古經の寫本を買はぬか、寫

眞は不用かと云ふ。子供の Kaleel をホテルにやつて、私の手提を取寄せ、Autograph book を出して、署名を求めると、今日は土曜即ち安息日だから、日が入ったら書かう、と云ふ。其處には、大きな硝子瓶にブランデーが盛つてある。安息日だから馳走をせぬ、と云ふ。

私共は、祭司の長に別れて、サマリア教會に往つて見る。狭い會堂である。靴をぬいで上る。晴衣の子供が十數人居る。大人も五六人居る。名高い舊約の五經を見る。羊皮紙の巻き物、銀の軸。銀の箱も立派なものだ。モオゼの兄アアロンの孫が書いたと云ふは譌としても、約二千年の古物ではありさうな。一卷は正、一卷は擬。平生は擬製のを見せる。

サマリア教徒は二百人足らず、職業は色々であるといふ。

K 君は、私共を其自宅に導びく。狭い巷路から上つて、二階の十疊ばかりの唯一室、それに庖厨がついて居る限である。K 君夫婦に、今年生れの赤ン坊、老母、弟、まだ外にも居た。請ぜられるままに、靴のまま Carpet に上り、腰かけて珈琲の馳走になる。老母は不機嫌で、大きな弟は無言で居る。50 p を赤ン坊への進物として、別れてホテルに歸る。

子供の K は、私共をホテルの直ぐ傍の其家に引張つて行く。洗濯をして居た祖母や、料理をして居る母が挨拶する。K の小さな妹等が、こましやくれて、握手の手を出す。K がフクシアの花を摘んでくれる。ホテルは、年 6000p で父の借りて經營して居るものさう

な。料理は一一自家から運んで来る。

午餐が出たが、私共は何も食ふ氣になれぬ。僅にパン少々と茶を飲むだけ。

此處の知事の書記と云ふ若者が、好いものを見つけたやうに、私共と話す。父か母かが英吉利人らしく、英吉利人でない一方を恥づて隠したいらしい。

(三)

午後は、扉を閉ぢて、休息した。

夕方になると、先刻の K 君が祭司長の子とやつて来た。日が入つたので、Autograph に書いて来た。小冊子など少し買ひ、100p を贈る。

外にも、英語を話すナブルスの土人が三四人来た。

私はこんな話をした。我儕東方人が歐羅巴人から學ばねばならぬ事は、我等の現在の生活をもつと眞面目に熱心に愛する事である。我儕東方人は、ややもすれば肉生を輕んじて、靈生に逆れ易い。然し、肉體と靈を分別するは、淺薄な事だ。それでは、いけない。靈を愛する者は、肉體を愛せねばならぬ。活潑な靈生は、強健な肉生に伴ふ可きものである。我儕が實生活に不熱心なのが、即ち東方人の西人に劣り易い所だ。獨立自由の生活をする爲に、我儕はもつと努力せねばならぬ。

此夜、私は熱が出て、よく眠れなかつた。

第十一 エルサレムへ

(一)

六月一日の朝六時、馬車でエルサレムへ向けナブルスを立つ。ホテルの婆さん七十近いのが、エルサレムに嫁入つて居る娘の宅へ同行さしてもらひたいと云ふので、快よく後ろの席に乗せる。馭者は、昨日私共をヤコブの井にのせて往つた彼で、ナザレのホテルのアブさんを思ひ出させる片眼の男。エルサレムまで運賃の500pは、親方が出かけに前取りしたので、馭者は少しふくれて居る。

ナブルスを後に、ヤコブの井を尻眼に、朝風を迎へて南に駛る。妻は袖珍亞刺比亞語辭典をたよりに、後ろの婆さんに、娘に會ひに行くのが嬉しかる、と云ふ話をして居る。私は昨夜來の熱と、昨日來の食氣不振で、ことごとく疲れ、眼を閉ぢながら揺られて行く。追々日が暑くなり、路が上りになる。此邊の山路は、十三年前まだ路普請が出来て居なかつたので、私は不馴れの馬に乗つて、落つる不安と、臀の痛さに、顔をしがめつつ通つた處だ。十三年の月日は、兎も角も其處に馬車道を通はせた。

九時 khân El Lubban に着く。泉に傍ふて、一軒の茶店がある。此前も晝食して、此處から始めて馬に乗つた。婆さんが降りる

ので、私も下りて手を假してやると、婆さんは、私の手を接吻した。而して茶屋に入つて、持參の辨當を食べ始めた。

茶屋は汚なし、小さな鐵管から泉の水の落ちる水溜のあたりも、牛馬驢羊の矢狼藉として居る。私共は少し此方にはなれて、無花果の蔭の石に腰かけて、サマリアのホテルからくれた果物の包を披いた。杏にあらず、牡丹杏にもあらぬ小さな圓つこい白緑に紅の暈のかかつたものが、出て來た。皮をむいて、一つ口に入れる。甘露のやう。此方で Mishi-mishi と云ふものであつた。此前の順禮行に、一度ハイファのホテルで食ふた覺えがある。其時は、名を知らなかつた。パレスチナ、シリアで一番多く食はさるる羊肉には、とくに鑿き鑿して、腹か空いても食ふ氣になれぬので、それには疲勞もあり、昨日からは熱氣があつて、夕食には殊にホテルで心をこめたらしい肉のフライや、色々出たのを、少しも手をつけず、まだ若い土人の亭主に顔膨らさした位であつたから、一包の甘露菜は、私共に大なる感謝であつた。

良久しく憩ふて後、馬車は急坂を上りはじめた。直ぐ後で變な音がする。と思ふたら、婆さん馬車の外に頭をつき出し、盛んに吐き、また吐かうとして、涙を流して苦しんで居る。驚いて、妻が背を撫でる。私が瓶の水を含ます。辛ふじておさまつたので、妻は清心丹を婆さんにのませた。私共への昨夕の馳走のあげ物を、婆さん辨當に持つて來て、したたか喰べた結果である。

急坂を上り切ると、これからの道路は、山の上ながら、十三年

前も馬車でエルサレムから駛せて来た路である。路傍に天幕を張つて、兵士が米を磨いで、白水を流して居る。パンは焼くに面倒だが、水さへあれば米は炊ぐに重寶なので、パレスチナの戦争では、米が大分陣中に用ゐられたやうである。埃及米が重と云ふが、もつと東方の米もあらう。

路程標が立つて居るに氣づく。エルサレムから 37 Kilometre。眺望もない山の上の谷を、道路は何處までもと通つて居る。日は熱く、馬は疲れ、吉羅米突標の間の長いこと夥しい。私はまた車上熱發し、疲れて頻に横臥を思ふ。稀に軍用自動車がやつて来る。

やつと強盜泉に来た。鐵軌などうつちやられて、あたりは臺なしてある。然し此前の旅に私が摘んだ岩壁の Maiden's hair は緑々と茂つて居た。婆さんは馭者に 泉の滴りを 瓶に汲んで 来てもらつて、飲んで居たが、“Sofuné”と云ふた。“温い”と謂ふのだ。私共はよく茶を入れるので、温い水即ち湯に關する會話の一片は出来る。“あんまり、まるうふ、まい、そふね”と云ふのだ。“何卒温い水を下さい”である。婆さんがここで其ソフネを使つた。

谷の道は、何處までも盡きない。馬は疲れて、歩みが牛に化ける。片眼の馭者は、其片眼すら閉ぢて、馭者座にこつくりこつくりやつて居る。妻は考へ込んで居る。後ろの婆さんも、吐くだけ吐いてしまつて、うつらうつらして居る。私は早くエルサレムに往つて、Bedの上に横たはりたい。吉羅米突標は、まだ 20 から 10 臺に引込んだばかりだ。私はぐづつく馭者をぶんなぐりたい焦焦した氣分を

抑へて、觀念の眼を閉ぢる。

やつと馬車は阪を上つて、高原に来た。滿目麥熟れて、傾く日の風にそよぎ、村が其處此處麥の穂末に見えて居る。高原盡くる處、エルビエの小村に来た。婆さん下り、私共も手を淨める爲め下りる。人家の裏の無花果の蔭、大石のほとり、其處に立つて眺むれば、三里の山谷を隔てて、橄欖山の兩塔から、エルサレムかけて、横長な壘を見るやう。北から來れば、此處で初めてエルサレムを見る。北へ去れば、此處が名残のエルサレムとの別れだ。此前此處でエルサレムに告別した時の心緒を思ひ出す。

その昔 名残 惜みし エホバの都

エルサレム をば またも 眺むる

私は、妻を挈へて、再び此處に来てエルサレムを眺むる機會を與へられた事を感謝する。然し身にある熱は私を弱らせ、妻が鉛筆で遠見のエルサレムをスケッチする間も、私は麥藁や牛羊糞の狼籍とした上に身を投げ出して大の字に倒れたいばかりであつた。カンタラの砂の上に寝たあの夕のやうで、あれよりもつと憊れた。

妻を促して、馬車に戻る。十二三から十歳前後の村の小娘が遊んで居たのが、皆馬車のぐるりに寄つて來た。銀貨を聯ねて額にかざり、頸飾りにもして居る。大きいのが、少し英語を話す。妻の金齒を珍らしがり、“奥さん、口をあいて御覽なさい”と云ふ。

馬車はビレエを出でて、浅い谷に下つた。日は追々傾く。私は今にも車上に倒れさうなのを、強いて腰をかけて居る。馬車が遅い。エルサレムが遠い。早くエルサレムに着いて、Bedの上に倒れたい。そればかり思ふ。

到頭 Scopus 山に來た。

それからがまだ中々ある。

それでも到頭エルサレムに來た。而してぼつぼつ燈火がつく街を通つて、ヤツファ門を入つて、午後の六時 Grand New Hotelの裏口に着いた。

私共は、これから娘の家に往く婆さんを、馬車の上に殘し、片眼の馭者に骨折として 50 P を與へ、帳場の肥大君に出迎へられて、階段を上る。五月一日に立ち、六月一日に歸る。私共の旅中の旅は、正に一ヶ月であつた。

馴染の老給仕 Aさんと、女中の Mさんが、私共を歓迎し、以前の八十三號室に私共を案内する。

私は念願通り早速 Bed に身を投げた。

第十二

エルサレム (二つたび)

(一)

一ヶ月ぶりに歸つて來たエルサレムは、依然たるエルサレムであつた。ラッドなどでは、一ヶ月前に花盛りの柘榴が、エルサレムでは今盛りであつた。ホテルは殆んど新顔で、唯ナザレで私の大喝の側杖を吃つた跛の Rさんだけが、私共より先きに北から歸つて居た。

日本からのたよりは、待つて居たが、それは私共を悦ばす便ではなかつた。新聞もぼつたり來なくなつた。私共が復活祭後に諸方に出した公開状の反響は、勿論なかつた。唯キルソン大統領の秘書官から受取の手紙が一通、それ切りであつた。期待した事だが、嬉しい事ではなかつた。

ナプルス第二夜から熱發した私は、エルサレムに歸ると疲勞が一時に出たのか、朝から三十九度近い熱が出て、弱つた上にも私を弱らした。幸に其れが過ぎると、今度は妻が發熱して、私より高い熱に彼女は弱つた。其内醫師にも見せず熱は下つたが、二人は疲れに疲れて、十日ばかりは、私共の室の Bed に大部分は寝て暮した。限りなく寝られるには、自ら驚いた。こんなにして、永く眠つ

て了ふのではないか、ときへ思はれた。

食堂へは努めて下りたが、パンと水を取るきりで、ホテルのきまり切った料理は、如何しても食ふ氣になれない。如何に今年が未の年でも、mutton は最早とくに愛した。放蕩息子のお歸りを祝うて居られた籠の肉も、度重なれば、いやになつた。羊肉に犢肉、きまり切った其れが大皿に持ち廻られると、私は見ただけでもう胸悪くなつた。トマト、胡瓜、朝鮮蓴、そんなものに稀に手をつけるが、大抵何時も空腹で下りて、また空腹で戻つた。餘り何も食はぬので、食堂の給仕や帳場が心配して居た。歸つた三日目に、私は熱と空腹から頭が茫となつて、視力が衰へ、如何なるのか、と思ふた。妻が矢張熱で寝て居たので、一合足らずの米をもらつて、アルコールランプと湯沸して私は本當に久しぶりに飯を焚いた。私も十五六の昔は、薪に石油をかけて塾の飯を炊き、肥後で不躰草と呼ぶトコ菜の浸し物位は造つた事がある。二十五六の交には、父母に卵饅位は造つてすすめた事がある。また私が露西亞から歸つて、女中をつけて妻を手術の爲に病院に入れた際は、順禮紀行を書いて居たので、時間惜しきと面倒省きで、二日分飯を焚き、黒焦をこしらへ、一寸歸つた女中が見かねてそれを握飯にして持つて行き、後には好い飯を炊いて置いてくれた事もあつた。要するに、それ以來の飯事だ。飯は富士の石室の飯よりも好く出来た。而して日本から持參の梅干を菜に、名古屋の宿から貰ふた瀬戸の小茶碗で、夫婦してそれを食ふた。一碗の飯の效は靦面、私の眼がはつきりして來た。妻も寝なが

ら人心地づいた。孟子の中にある、陳仲子が虫喰ひ 残りの李を喰つて、やつと眼見る事あり、耳聞く事あり、と云ふ話が思ひ出されて、苦しい中にも可笑しかつた。

此戦争で餓死した人間家畜の數は多い。半死半生の目に會ふた者、また現に會ふて居る者は、獨逸、埃地利をはじめ、夥しい數に上る。私共もいくらか其苦を今味はうのであつた。食ふ物がなくての空腹も空腹なれば、食ふ物を前にしても食へぬ空腹も、空腹に相異はない。私共は、食事の銀籬を聞くと、期待と空腹で食堂に下りる。例の如く、五色の硝子窓の下の二人卓に、相向ふて就く。今日こそはと思ふて居ても、例によつて例の如く眞黒黒の骨つきの羊肉や、輪切りになつた犢肉の大皿を一目見ると、如何しても食ふ氣になれぬ。取り合はせの野菜物など少し攝取したきりで、珈琲の一杯、あるひはデザートの杏の數個を取つて、依然たる空腹で二階に歸る。

入獄者の經驗に徴するも、不自由な境涯で一番思ふは食の味さうな。水を見て飲めない狂水病犬のやうに、食物を前にして食へない病に罹つた私共の食堂から室に歸つて溜息と共にごろり寝ての此 Bed から彼 Bed への話は、食物の外に出でない。カイロのセファドホテルの Beefsteak はうまかつたな、香港の廣東料理はうまかつたな、好きな筍の季節は最早過ぎた、玉川の若鮎が出る時分——そんな事ばかり口にする。

然し、話では胃が承知せぬ。

私は平生服の大島の上に、夏外套を引かけ、ある時は靴、ある時は上靴のままで、風呂敷持参で、近いマアケツトに食品買ひ出しに往つた。一番の掘り出し物は、三顆で 2P の青無花果。まだ走り物で、高價な上に、まづいだらう、と歸つて緑の皮を剥けば、それこそ眞白い雪の膚。わんぐり噛めば、冷やりと甘露の塊。頬が痛いやうなうまさであつた。色美しい紅櫻桃は、酸味が勝つて居たので、砂糖で煮て喰べた。ナブルスで味を知つたミシミシも、慾を云へば齒ぎれがわるく、爽やか味に欠けたが、たしかに甘いものではあつた。葡萄はまだ酸かつた。一個五十錢の眞桑瓜は、根から味がなかつた。エリコのバナナも、まづかつた。ある時は、大きな茄子を買つて歸つて、それを私共の湯沸しで鹽煮にして喰べた。ある時は、卵を買つて、湯煎にして食べた。ある日は罐詰を探して、陣中兵士の用に小切りにしてあるバインアップルを食ふたりした。

まだ足りないので、私共は持参の赤倉葛を練つた。三本持つて往つた鯉節を、割つては食ひ、割つては噛むだ。如何したら此腹がふくれるか、と唯それのみ思ふ。

六月中旬に入つて、ホテルは亞米利加の土地調査委員が來ると云ふので、色々特設けが始まつた。やがて十一人の快活な連中がやつて來て、二階の好い室は皆占領され、廣間は其食堂になり、談笑の聲賑やかに、時には“亞細亞土耳其”の明細地圖が、朝まで Sofa の上に置き忘れたりしてあつた。私共はまた多分は喰はずに歸る食堂に下りて往くとて、二階の廣間に、雪白の Cover をかけた長卓

が、青無花果を山の如く盛り上げた硝子盆や花などを飾つて、紋切型でない馳走が待つて居さうなのを、羨ましく見て過ぐるを禁じ得なかつた。

エルサレムに歸つて十三日目に、Hensman さん夫妻から私共は午餐に招かれた。これは大なる施餓鬼であつた。H 夫人は、私共がまだナザレに居る内、英吉利から着いたさうで、私共がエルサレムに歸ると、二度程夫妻でホテルに訪ねて來た。H 夫人は H さんと同年だが、そんなに老けては居なかつた。夫人は妻に會ふ事を悦んで、私が此前必妻を連れて來ると云ふた言を覺えて居た。後の度には、私共は H さん夫妻を室に請じて、綠茶など出した。夫人は砂糖を入れぬ方がヨリ好いと云ふて、喜んで綠茶を飲んだ。私共は其前に午餐に招かれたが、ひどく弱つて居たので、延び延びて、この日やつと其招きに應じたのである。

H さん夫妻の住居は、エルサムの北西郊外、靜かな邊にあつた。橄欖館は九月迄貸してあるので、取りあへず此處に納まつたのである。ある英吉利婦人の所有で、二階は猶太人の醫師が借り、下の Flat を夫婦で借りて居る。私共が道に迷ひ尋ね尋ねして往つた時は、H さんは行き違ひに私共をホテルに迎へに行き、而してテベリア湖で私共に會ふたと云ふ醫師が、これから停車場に往かうとして居た。やがて H さんも歸つて來た。

七十近い老夫婦、五年に近い生別れのあとの再會、流石に嬉しさうである。H 夫人は體一つで來て、荷物がまだ着かぬので、殆ん

ど着のみ着のままに居る。寄せ集めものの家具が、貧弱に客間を飾つて居る。Hさんの兄の子で、Hさん夫婦の養嗣子である Robert 君は、先にメソポタミアにやられて居たが、つい先日印度が不穩で、急に印度にやられたさうだ。エジプトの騒ぎを、何でもないと事もなげに打消したカイロの少佐に、私が“然し、印度もある”と云ふた言が、犇犇と手答へが來た。“メソポタミアには、Robert の亞刺比亞語が役に立たうが、印度に何の用があらう？”と Hさんは舌鼓を鳴らして居た。R君は三十六歳、まだ獨身である。妻は老人物の紙入と、美しい娘物の紙入れを H夫人に贈つた。美しい方は名刺入れにしゃうと、夫人大悦びである。私は R君にと云ふて、蓬菜の花を描いた扇を、Hさんに托して置く。H夫人はそこらをかき廻はして、やつと取り止めたものの一つだと云ふて、私共に眞鍮の輪瓶をくれた。それは多分ダマスコもので、原料は恐らく日本物かも知れぬ。

小さな食堂で、私共は午餐の饗になる。パンにバター。罐詰の鮭に、胡瓜とトマト。二皿目は、鶏肉とベエコンと馬鈴薯と青隠元。葡萄酒に、レモン水。Dessert がミシミシのイチウに、ミシミシの生菜。それは私共には、眞に太宰の味で、確に半月の空腹をいやした。

目下夫婦に、アルメニア人の女中が一人。これは、二十五年も Hさん夫妻に仕へて、十三年前に來た私の顔を見覚えて居た。月給は五十志さうな。H夫人は、妻と、女中拂底の話をして、英吉利では中々手に入らぬ、と云ふて居た。Hさんはアルメニア人をほめて

居た。アルメニア人が伶俐で勤勉だから、土耳其人が嫉妬して虐殺も起る、と云ふ。

食後、私共は一室に晝寝し、それから茶の馳走になつて、明後日曜の午後を約して歸つた。

(二)

私共が北から歸つて、半飢状態でごろごろ Bed にころげて居る内に、夏はまさしくエルサレムに來た。私共の室から眺めると、夕方向ふ隣りの平屋根や、其向ふ向ふ隣りの屋根に、夕涼の男女、少年少女が、涼しい夏装して、心地よげに歩いて居る。

日落ちて 燕子 流るる 夕涼に

子供 群れ遊ぶ 平屋根の上

白 白茶 淡紅と 水色 黒 きぬも

そぞろ あるくよ 夕涼の 屋根

月も宵宵好くなる。此月は、丁度回教曆の第九月 Ramadan の月である。教祖マホメツドが、ヒラの洞に籠つて、祈禱冥想し、コランを書いたそれを紀念の月で、苟も回教徒は、日間は斷食し、朝暮の禮拜殊に大切な月である。私共の部屋から見て居ると、圓とした

月が、死海の向ふの山から昇つて、眼八分に見る Omar の Mosque のほの闇く高い minaret から、夕の勤行を呼ぼう何とも云へぬ佳い哀切な聲が、私共を慄とさせるのであつた。

圓月や オマル の モスク ミナレット

祈禱を 觸るる 美はしの 聲

私共のエルサレムの二度目が半断食であつたのも、偶然回教徒に調子を合はしたやうなものであつた。

* * *

パレスチナ逗留も、前後二ヶ月半に涉つた。巴里の講和會議も、兎に角終り近い。二週間の休養で、空腹ながらに疲労は少し直つた。Fort Said の南さんに手紙して、歐羅巴への船便を問合せたら、非常の船客輻輳で、馬耳塞や伊太利の船便は中々手に入らぬが、兎に角 Port Said に来てお待ちになつたら、と云ふ返事であつた。そこで、私共も十六日にはエルサレムを立つて、兎に角坡西土に出ることにきめた。荷造りも出来た。坡西土から、如何様の道筋をとるかには分らぬが、要するに歐羅巴を経て、亞米利加を経て、日本に行くのは即ち歸るのである。日本を出て、パレスチナまでは、“往く”氣であつた。パレスチナからは、如何様に長くかかつても、歸るのだ。換言すれば、パレスチナは私共の旅行の頂上であつた。私共は兎に角來た。世界の Minaret のエルサレムから、私共は小さ

い聲を上げた。妻にエルサレムもベタニヤもナザレも見せた。私共の役は済んだ。これからぶらぶら道草を食ひ食ひ、私共は日本へ歸るのだ。

六月十五日日曜の午後、約によつて H さん夫妻の茶の招きに往つた。エルサレムの告別の手始である。H さんは、H 夫人から健忘を宥められつつ、笑つて Robert 君の手紙を探がし出して來て見せた。それは印度から叔父さん叔母さんに宛てた鉛筆はしり書きのものであつた。H さんは、またカイロからの私の手紙に H さんが書いた返書が、カイロからつい先日三月ぶりに還つて來たのを、私にくれた。H さんは、土耳其政府の爲に、メソポタミア其他諸處に他の人人と監禁されて居た時の寫眞やら、仲間の一人が描いた水彩のスケッチやらを、私共に見せた。土耳其の史丹を中央に大きく、獨逸皇帝と埃地利皇帝を左右に低く出した土耳其の旗物や、蘇西地方を壓迫して獅子の英吉利を手も足も出ぬやうに縛りつける土耳其漫畫などは、土耳其の自大的心境を露骨に語つて、どうしても一喝夢をさますの必要を思はじめた。H さんはまた戰爭中英國で死んだ老兄の寫眞を見せた。それは H さんに肖て、より老いて居た。老兄が飼育して居た六百磅もする高價な犬の子の寫眞も見せた。H さん處にも、一昨日は見えなかつた一疋の犬が今日は客間に繋がれて、犬好きの客に愛想をした。H 夫人は自身達に関する新聞の切抜を見せ、今度英吉利から佛蘭西を経てパレスチナに來る途中でも思はぬ所で見知らぬ將校などに挨拶され、初對面のつもりで返事すると、曾て

Olivet House でお世話になつたではありませんか、など云はれて面目なくも嬉しかつた事などを話した。

私共が客間で、チグハグの茶器で茶菓の馳走になつて居る時、三十餘のカアキイが二人入つて來た。一人は、Robert 君の家の近所の人で、R 君とは小學校仲間であつた。パレスチナ軍に従ふて、今日初めて機會を得てヤッフア附近の燈臺番をして居る友を連れて、訪ねて來たのである。思ひかけない人の來訪に、H さんも夫人も驚喜して居た。H さんは、R 君の小學校友達から色々國だよりを聞いた。R 君の實父、即ち H さんの老兄の死についても、初めて細かに聞いた容子であつた。居村を老人が歩いて居る内、自動車避けるとしてうち倒れ、頭部をうつつて其まき亡くなつた事を、カアキイは事細かに話す。H さんは、小さな舌鼓をうつつて、悄然と聽いて居た。老兄の葬式には、歸英中の H 夫人も往つたさうであるが、H さんは其兄の死について初めて詳細を今知つたのである。先刻見せた寫眞の老人が、即ちそれであつた。R 君の小學校友達が來たのは、R 君が歸つて來たやうなものだ。H さんの亡兄の死が、R 君の小學校友達によつて語らるるのは、亡兄が其子を便つて在弟に來たのだ。十三年前の遠來の客は、戦亂を経て四年の俘虜から無事に歸つた曩時の橄欖館の H さんと重ねて善ない主客の面を合はせる。八年後に金婚式を迎ふる H さん夫妻は、死別かも知れなかつた四年の後に、命めでたく白頭の再會をする。甥の R 君の遠からぬ歸來を豫報して、R 君の小學校友達が來る。それが H さんの亡兄の消息を持つ

て來る。洵に大戰を背景にして、別れたもの會ひ、離れたもの一になるめでたい一幕である。此悲喜相半ばした家族的團樂の情話の中に、H さん夫妻と二人の兵士を残して、私共は再會を望みつつ別を告げた。

(三)

六月十六日の朝、私共はエルサレムから坡西土への通行券を受取る可く、且は知事に告別すべく、馬車でダマスコ門外の知事官廳に往つた。

知事の訓令を受けに係の士官が往つて居ると云ふ事で、私共は一時間ばかりも旅券課で待たされた。薄物を被たシリア娘の Typist が、器械をこぢらして困つて居るのを、若いシリアハイカラの同僚が、面倒を見て直してやつて居る。丈の高いあの副官大尉が、太つた婦人と淡紅服の娘を案内して來て、旅券願書用紙を指して注意すると、淡紅が萬年筆を出して、走り書きに書き入れて居る。

其内、見知り越しの若い係が來て、直ぐテーブルの抽斗から私共の passport と通行券を出してくれた。

私共は、支關側の副官室に往つた。思ひがけなく、テベリアで職つた Miss C. が來て居る。Bagdad の方へも往つて見たいと云ふて居た彼女は、それをよして、去三日にエルサレムに來たさうな。Fast's Hotel に泊つて居る。

卓上電話で笑ひながら上長官と話して居た副官は、知事は非常に忙しいので、立話で御免を蒙る、と云ふ。私共が玄関に出ると、知事は扉をあけて出て来た。私は手短に今夕出立の事を告げ、長逗留の世話を謝し、一本の扇を贈つた。角力取を描いた其扇を抜いて見ると、知事は笑貌になり、“北齋張ですね”と通な言を云ひつつ、私共を室内に請じた。北齋、歌麿、廣重が大好きさうな。私共はのまぬ巻蓑をすすめたりして、如何お暮らしてましたと問ふ。“見ず、聞かず、唯食べて寝ただけでした。”と私が答へる。“それが一番の生活法です。戦争中は、それが出来なかつたのです”と知事さんは曰ふ。

Autograph bookを出すと、知事さんは悦んで書いてくれる。倫敦に往つたら、旅人倶楽部には是非往つて御覧なさい、と勧める。私共が立ち上ると、知事も立ち上りつつ、不圖思ひ出したやうに、

“私は日本人に一命を助けられて居ます。”

と謂ふのは、二年前地中海で知事さんの乗船が獨逸の潜水艇にやられた時、乗りつけて救つたのが日本の駆逐艇であつたさうな。

“ほんに其事を書けばよかつた。”

と知事さんは云ふ。Autograph bookには、“北齋、歌麿の同國人に、愉快な紀念として”と書いてあつた。

“それはお役に立つて嬉しい事でした。”

と私も云ふ。浮世繪と日本海軍が、私共と知事の間にあつた軽い皮肉の障子を取り去つて、私共は快い握手の別れをした。而して丈比

べでは適に私共を見下ろす副官や、Miss C. とも懇々握手して別れた。

Hさん夫妻には、昨日別を告げるし、知事さん達には今日暇乞をするし、跛のRさんには、午餐の時に、温かい告別の握手を交はす。長い間世話になつた私共の老給仕の Anton や女中の Maria にも、贈る可きを贈つて、名残を惜しんだ。さし當つては、これと云ふ心残りも、エルサレムに無い。あると云へば、エムサレムが少しも私共の來訪を気づかずに私共を手放すのが、心残りであるが、然しそれは時を待たねばならぬ。

* * *

夕近く、早夕食に下りる前に、私共は屋上に上つた。四月中は日に三度も上つたが、北から歸つて以來、疲勞の爲に、私共は唯一度上つて見たきりであつた。

夕の空、夕日に流るる無数の燕子、死海向ふの山、橄欖山、スコバス山、オマルのモスクや Church of Holy Sepulchre、畢竟それは美しいエルサレムであつた。私共はエルサレムを祝福した。此エルサレムは、私共にとって、四海の同胞を愛の合唱に呼ぼう minaret であつたのだ。それは各自に各自の音をわめく世界の騒音の中に、何程の反響も喚び起し得ないかも知れぬ。然しそれは消えるものではない。此 minaret は、また私共の旅行の頂點である。エルサレムが私共の山である。日本から來て、此山に上つた。此山を下りて、私共は日本に歸る。此山に何の知らせもなく突然ぼんやりと現はれ

た私共を、エルサレムに見得た者は、恐らく唯一の一人もあるまい。
“かれ己の國に來りしに、其民これを接けざりき”と約翰傳の記者
が書いたやうなものである。誰も知らなかつた。誰も見なかつた。
然しそれが分明する日が必來る。分かる日は、私共がまた現はれる
日かも知れぬ。そんな事を思ひつつ、私共は重ねてエルサレムを祝
して屋上から下りた。

第十三 パレスチナを後に

(一)

六月十六日の夕七時、私共は前後二月足らず世話になつた
Grand New Hotel を後に、ヤッフア門を出て、馬車でエルサレム
停車場に往つた。

今度も Ludd に一夜を明かすのかと思ふたら、着くと直ぐ埃及
行きのに乗り換へると云ふことである。此前荷物持賃を澤山食つ
た荷夫の中供子供が、私の顔を見覚えて居て、笑ひ興じつつ争ふて
荷物を運び込んでくれる。エルサレムの別れに、六人に各10pづつや
ると、あるものは舉手し、ある者は握手し、皆悦んで下つた。而し
て歩廊で一齊にわあと歡送の聲をあげた。

突然人の顔が外に見えたと思ふと、車室に上り込んで來た。
Miss Claridge が私共を見送りに來たのであつた。連れの紳士は、
横濱に居たさうな。Miss C. は倫敦である日本の畫家と懇意だと云
ふ。Mさん？然。それは面白い、先刻 C さんの見てゐる前で、S 知
事に私共の贈つた扇面を描いた渡君は、其 M さんの甥に當る、と
私は云ふた。洵に世界は狭い。また何處かで撞見でつくわさせう、と言ひ合
ふて、C さんは私の手を握り、妻を接吻して、連れの紳士と下りて

往つた。

九時頃になつて、やつと發車。エルサレム生れで、近頃結婚したカイロの兄弟の家に遊びに行くと云ふ、髪をいぼじりにした猶太人の娘が同室する。その言によれば、カアキイの驛員が一等だと云ふて私等を連れて來た此處は、二等室であつた。後で件の驛員が顔を出したので、聞くと、一等も二等も同じと云ひ、一等には火光がないと云ふ。Ludd までではあるし、面倒だから其ままにして置く。

美しい星の夜である。六月中旬と云ふに、夜が中々冷えて、夏服の私共は夥しく寒い。而して夥しく眠い。

轟轟の響きが續いて、氣が遠くなる。

氣がつくと、最早 Ludd に來て居た。時計は十二時近い。

私は睡氣の中々さめぬ妻をせき立てて、外の人足に數多い私共の手荷物を窓から手渡した。而して妻と荷物と人足を埃及行き汽車に向はせ、私は Portmanteau を受取るべく前部の貨物車に奔つた。夜は晩いし、燈光は闇く、私共の Portmanteau は貨車の下積になつて居て、中々出て來ない。彼方此方に呼ばれてうろつく人足を勵まし、兩人が貨車に攀ち上り、やつと取り下ろさせる。それを人足に負はせ、私は大汗になつてカイロ行き汽車にかけつける。妻がまだ外に立つて居る。通行券を見ねば乗車を許さぬ、と士官が云ふさうだ。士官が來る。通行券と切符を見て、士官は私共を暗くて燈光のない一等寢臺車に導いた。暗い中に誰やら座つて居る。一言云ふて、士官が車外に追ひ出したのを月明に見れば、赤帽をかぶつた

跣足の男であつた。

取りあへず私共は用意の小田原提灯をつけた。

突然汽車は動き出した。

“よかつた。”私共は唸やいた、色色の意味に於て。

額の汗を拭いて、見廻はす。それは私共が來る時乗つたのと同じ様な、二段になつた寢臺。隣の室は、何れもからあきで、唯一番後の區に旅客の影が其處にだけついて居る瓦斯の光で見えた。私共は提灯を消した。而して私は下に、妻は上の床に、セルの膝掛と外套を被て横になる。

パレスチナも、いよいよお別れ。これからは、ぶらぶら歸るのだ。

私共は、長い息をついた。

汽車は、月夜を轟轟と南に駛つて行く。

(二)

六月十七日。眼があくと、汽車はまさに地中海の波打際を走つて居る。

魔法瓶の水で顔を洗ふたり、ホテルから持參のパンを朝食に食ふたりする内、汽車は海に離れ、沙地の停車場を幾箇か過ぎて、朝八時過ぎカンタラ東停車場に着いた。

荷物も人もごつちやに例の無蓋自動車にのせられる。去る三月

家、曇い一日を私共のくらしした Y. M. C. A. の假舎を、車上から見て過ぎる。“Tommie”さん達の手すさみか、往く時なかつた花園などが、新たに設けられて居る。

此前、旅券を調べられた小さな天幕で、また調べられる。此前居た士官達が、私共を見覚えて居て、色々世話をやいてくれる。私共は随分ゆつくりと往つて歸るに、まだ居るのか、と氣の毒に思ふ。歎あればこそ四年も住んだ沙の上、平和になつての幾月は、嘸永からう。

Ludd まで同室した猶太人の娘は、カイロまでの汽車代はいくら、など連りに聞いて居る。

天幕の人の注意で、私共はゆつくりした二度目の自動車に乗る。やがて運河の舟橋を渡る。運河には、兵隊さん達が今日も盛んに泳いで居る。運河を渡ると、最早パレスチナは悉皆私共の背後になつた。

カンタラ西停車場で、また旅券の檢閲がある。黄色紙が渡されるのは、虎列刺地域を通過の證で、坡西土に着いたら衛生局に出頭せねばならぬ、とは面倒だ。

此處の檢閲所にも、同じ人が日やけのした顔を紅くして、事務を執つて居た。埃及人の官吏が、私共を見覚えて居て、荷物の事何くれと世話をしてくれる。

十一時カイロから來た汽車に乗つて、十二時過ぎ坡西土に着く。Marina Palace Hotel の客引きに荷物の一切を托し、私共は自

動車で直ぐ Hotel に往つた。

第十四 船待ち

(一)

パレスチナから坡西土に出ると、山中から世界の大通りに出た心地がする。約三月、新聞と云ふ新聞も見ず、世の消息も殆んど聞かなかつた私共は、坡西土に出て、故國の消息にこそ接しなかつたが、此處には世界の風が吹いて居た。南さんは商用で伊太利に往つて居た。それから倫敦へ往くので、二月程かかると云ふ事であつた。海軍大主計熊さんも、最早居なかつた。南さんの置手紙と共に、去五月亞米利加廻はりで露東の途次寄港した O. S. K. の鹿の彦さんが、南さんに私共の消息を聞いて、手紙と寫眞を残して往つた。南さんは居なかつたが、南さんの實弟慶君と、南夫人 Leah さんが何くれと私共の爲に面倒を見てくれた。私共は南さんの住居で又もや晚餐の馳走になり、好物の水瓜と眞桑の馳走になつた。L さんには祖母に當る Fioravanti のお婆さんから、其二階の商賣物の日本品が澤山飾つてある處で、茶菓アイスクリームの馳走になり、L さんには義理の叔母に當る Signorina Tosca のピアノを聞いた。お婆さんの息子の一人は、前にも言ふた通り、年久しく横濱に住み、アルゼンチナの副領事を勤めたりして居る。其人の日露戦争に關する伊

太利文の小著を婆さんくれたので、私共は英文を読む Tosca さんに英文不如歸を贈つた。少し日本語を使ふ L さんの世話で、妻は夏の旅行服と夏外套を坡西土で造つた。

パレスチナの半斷食は、坡西土のホテルで完全に破ることが出来た。坡西土は魚が殊にうまい。鱈、小蝦、大きな何とか云ふ魚、其他口にする程の魚は大抵うまかつた。地中海は大きな瀬戸内海で、瀬戸内海の魚がうまい意味で地中海の魚がうまいのであらう。外の肉類も、エルサレム其他の Mutton や Veal の後には皆うまかつた。水瓜の味も相應に好かつた。眞桑は見かけ程うまくなかつた。私共は此處で皆のする事を見習つて、薔の袴をはかせた伊太利の葡萄酒罎から Chianti を飲む事を覺えた。もとより砂糖を和し水を入れて飲む酒飲みだから、程度は知れて居る。私共がよく氷水を飲み、氷を用ゆるので、赤帽赤帶黒い顔の給仕の子などが馴れて、私共が食卓につけば、直ぐ氷の盃を持つて來た。

私共の半斷食は坡西土で破れたが、Ramadan の斷食はまだ續いて居るので、Hotel の黒い給仕達は何れも疲れた容子をして居る。夜になつてやつと一食するだけさうな。其様なのを前にして、存分に飲み食ひするのは、氣がひけてならなかつた。労働者でも回教徒は皆それなのだ。慶君の話に、船艙に納め物を持つて行くにも、人夫や舟子が斷食故に弱つて十分働けないから、自然自分手傳ふて舟を漕いだりすると云ふて居た。斷食も時處位によつて悪くはない、或時は必要であるが、こんなでも困る。回教が過ぎ去る可き理由の一

つに、Ramadan は数へられねばならぬ。

(二)

私共がぼるねお丸を此坡西土で下りたのは三月十三日で、今は六月も末であるから、丸三月は埃及からパレスチナで過ぎたのだ。可なりの長逗留であつた。其ぼるねお丸は、慶君の話によれば、歐羅巴から亞米利加へ廻はり、パナマ運河を通過して歸つたとの事である。私共が船の上で若しかしたらと云ふ話を聞いた通り、それでは世界一週を果たしたのであらう。これは私共に悦ばしい事でありました。

坡西土は勿論暑い。夜もバルコニーの扉を開けて寝なければならぬ夜があつた。外出には洋服、居るには和服で、食堂にはあるひは単衣に単衣羽織、越後上布に絹の羽織、フェルト草履に扇を持つて現はれた。日本の船が毎日の様に寄るので、食堂でよく日本人を見かけた。船から食事に上つて来た支那人の學生連や、支那婦人の妻子をつれた白人の家族もあつた。客は矢張英吉利軍人が多かつた。テベリアの湖の軍政署で私共に旅券をくれた一大尉は、私共が其顔を見て居なかつたので、顔憚らない顔をした。エルサレム以來顔馴染の猶太婦人の家族は、漆洲行きの船を待つて同じホテルに長逗留をして居た。食堂の真中の一人食卓に、小さな自動扇を使ひつつ薄ものの黒い絹から白い首筋を見せて、小説を見たり、手紙を

讀んだり、長いことかかつて食事する怪しい女もあつた。新聞賣や花賣りがよく食堂の窓から覗き込んだ。薔薇、カアネエション、とどり美しいが、中にリボンの様な平たい線の莖に白花をつけた Jessamine の芳烈な香は、夜は寢室に置けない程香つた。

私共は兎に角伊太利行きと決した。伊太利にはよく日本船が行く、とエルサレムで Hensman さんも注意してくれた。慶君の話によれば、伊太利行きの定期船と云ふものは無いが、日本船がよく行く、と云ふ。兎に角何時乗る事になるや分からねぬので、私共は先づ荷物の整理にかかつた。南さんの事務所裏の物置きに宛てられて居る一室に、引越荷物程の大袈裟な私共の荷物が三月以來預けてある。私共は其處へ日参して、荷物を整理した。不用の書籍衣類雜品は、柳製靴と大きな木箱に入れ、明年になつてから日本へ返送してもらふ事とし、冬物類を入れたトラック二箇は第一の便で倫敦に送つてもらふ事にした。而して黒トランカー、Portmanteau 一、Suit case 一、Hat case 一、中形革製 bag 二、傘袋、あけびの食籠二、絨氈四季袋、これだけで歐羅巴を横行する事にした。私共が大汗になつて荷物を扱つて居ると、慶君が扇風機をかけた、Ice cream を持つて来てくれたりした。

荷物は直ぐ出来たが、船はなかなか来なかつた。荷物が出来上つて以後は、私共は要するに唯船を待つ人であつた。坡西土の新聞港は、見物する處もない。レセツプの像まで運動に行き、市街を二三遍歩くと、最早それが終りだ。市街も夜八時を刻限に皆戸をしめて

しまふ。今更だが夜の空の美しさ。本當の紺青と云ふのだらう。深い黝い透明とでも云はねばならぬ美しい空の色。星の大きさ、光の強さ。時々炬火か、電燈かと思はれる事もある。此美しい空の下で、埃及人は何をして居るだらう？地方新聞はまだ其處此處にいぶる煙を傳へるが、要するに英吉利の威壓で一寸閉息の態である。然しそれは熄んでしまつたのではない事は、云ふ迄もない。私共はある時港の旅券検閲所に往つた。其處には、一人の年長な英吉利人と三人の若い埃及人が事務をとつて居た。アルメニア人が旅券を紛失したので、再度の請求に來た。不馴らしい英吉利人は、古い帳簿を繰つたりして、額から汗をたらして居る。人の好きさうなおちさんが、若いアルメニア人からつつかれ、下役の若い埃及人からがみがみ逆振を食はされ、君のペンを貸せと云ふては別ねつけられ、遽として人前羞かしさうな容子は、見るに見かねた。餘計な事をしやうより歸つて手馴れた商賣でもし玉へ、と忠告してやりたかつた。次に往つた時、“隨分うるさいでせう。”と私は彼に云ふた。

私共の室は、Marina Palace Hotel の三階にあつて、長い共通のバルコニイは東に面して居た。坡西土の港と、地中海の一部が、眼の前に、それから港の右手は運河の入口で、向ふは其處に砲臺などが適に沙の上に見えて、其沙原はずらと私共のつい先日後にしたパレスチナにつづいて居る。朝しばらくの間は朝日が暑いが、追々日に高く南に廻はると、バルコニイは蔭になり、午後は段々涼しくなつて行く。私共は其處に Rack chair や軽い小卓を出して、讀み

書き、水瓜も食ひ、茶も飲むだけだ。

直ぐ下は海岸通りで、萬國の人種展覽會の様にさまざまの人がさまざまな装して私共に觀られるべく通る。通りの向ふは直ぐ港で、あらゆる船が東から西へ、西から東へ通り、ある船は泊り、或船は立つて行く。これも斷食で弱つて居さうな土人の苦力が、石炭舟を横づけにして、一枚板の橋を粉炭の箆を背負ふて運んで行き、あけては還る。私共がパレスチナ逗留中苦力と運河會社の間に賃銀問題から争が出來て、苦力は同盟罷工した。何でも六割以上の増給要求で、會社が頑として勝つたさうだ。南さんの手紙にそんな事を書いてあつた。目下はそれで一先づ納まつて居るらしいが、黒蟻のやうに労働する苦力等の骨折を見ると、中々其ままで済むまいと思はれる。器械を使ふ程なら、何故もつと人力を省く石炭の上下機を發明しないのだらう？と思ふ。女の労働は勿論の事、男の労働だつて、無茶な労働はいけぬ。

日の丸の國旗を立つた船が通ると、流石に私共の胸は躍る。郵船の船で、歐羅巴行きの一等甲板に、涼しい日本服の婦人が藤椅子にかけて此方を見て居る。誰だらう？と思ふ。泊つた日本船に、水瓜賣りの舟が一ぱいたかつて居る。それを箆の様なものに入れさして上からつり上げて居る。高い甲板から、裸になつて、港の水に飛び込む氣早な船員もある。時には往と復との日の丸が三隻も會社前にずらり横づけになつたりして居る事もある。戦争中は、日本船が月に六十隻以上も往復したもので、今も運河通過噸數競争で會社の獎

勳賞の二等は、日本が占めて居る、と慶君は話して居た。

時は食堂に蔭うつて、岸壁近くと大きな見上げるばかりの船が通る。昨夕居た大きな客船が、今朝見れば出てしまつて跡もなく、はかない感にうたれる事もある。汚ない船、大きな船、荷物船、人の船、何れも一隻前のそれぞれに印象を残して行く。英國旗を立てた船の甲板一ばいにカアキイを積んで、西へ出て行くのは、歸還兵であらう。隙間もなく甲板に立つて、此方を見て居る姿が一一喜悅に溢れて見える。私共も悦んでハンカチを振つて送る。早くすべてを送つてやりたく思ふ。それに引易へて、同じカアキイをのせて同じ英國旗を立てた船でも、運河へ向ふて行くのは、印度へ行くのではないか、と不安と憂懼にうたれる。

私共の心は、船と共に東に歸つたり、西へ往つたりする。また午の日に茫となつた港の向ふの沙原を空と一つになるまで見やつては、つい後にして來たパレスチナにも心は行く。

(三)

Jew の 女

エルサレムからの歸りがげ、蘇西運河をカンタラに渡つて、パスボオトの檢閲をまつ間、沙の上の無造作な板小屋に、わたくしは夫のあとについてはいつた。かぎ形に据ゑられたせまい板の縁代

だ、先着の婦人や子供、手荷物、食物籠などで、ふさがつて居る。

これでも結構照りつける日だけはよけられる。夫は小さいあきを見出して、わたくしに、腰かけてまつて居よ、と手提カバンとあみ袋を渡した。大勢の子達の視線のなかに腰かけやうとすると、「それは私の席ですから」と女の聲。わたくしはふりかへつて見た。見覚えがある。おお、それはエルサレムの知事官廳の二階で、旅行券をもらひに往つた時、淡紅色の服を着た年頃の色の浅黒い娘をつれて、小さい辨慶縞の夏服、年よりらしい赤の飾などつけて居たあの六十近い嚴丈な婦人であつた。

わたくしは直ぐ立上り、入口に近い隅の方に、手提カバンを沙の上に置き、其上に編袋をのせ、蝙蝠を杖にして立つた。夫は役所の方へ往つた。

もう晝ちかいのか、わたくしの近くに腰かけて居た土地の肥大婦人は、大きなあけび籠からシリア風の平たいパンとチイスを出して食べはじめた。さきの老婦人ところには、知合と見えて、カアキイ服の若い軍人がレモネエドを十本ばかりさげて來て、ボンボンと粒をぬいては勢よく粒をうしろにはねる。一つがわたくしの近くにとんだと見ると、老婦人はブツと手をあげ聲で制した。兵士は私の方をむいて、サアレエとあいさつした。わたくしは不愛想に唯ノオと一言はねるやうに答へた。

ひどい沙漠の暑さである。老婦人もエルサレムで會つたわたくしを思ひ出したらしい。籠からパンを出し、薄くきつて、大きな銀の

蓋物にいつばいはいつたベナナ色のつやつやしたバタを一片一片にぬる。年頃の娘二人、十六位の息子、十四五、十二三、七八の三少女、皆うれしさうに見て居る。老婦人はまづ自ら立つてわたくしに一片をすすめる。レモナアドは如何？と愛想をいふ。席の事で氣の毒になつたと見ゆる。わたくしは再三辭した。十二三の娘は母の心をうけたのか、好奇心よりか、アルミニウムのコップ片手にレモネアドをつぎながら来て、こぼれる程ついでコップを私にどうぞとすすむる。女同志のさうさう無下のことはりも心ならず、私はうけた。

までどまでど夫は來ない。わたくしはバタがとけて流るるので、心ならずも立ちながらひとりたべてのんだ。

二番目娘の十八九が、わたくしのそばに来て話しかける。家族はオーストラリアに行く。自分も濠洲から日本へゆく。あなたはどちらへ、などきいたりする。早口で、ききとりにくい。

お婆さんは大きい娘に言ひつけて、電報をかけさしたりして居る。それは坡西土のホテルへでもかけて居るらしかった。

二

坡西土に着いて、マリナホテルに入る。夕食に食堂に出ると、さつきの老婦人連も此ホテルに来て居るのであつた。双方會釋を交はす。

彼女達は濠洲行の船を二週間此處にまたねばならぬといつて居た。わたくし達もイタリヤ行の船をあてなくまつ。其間によくバラ

なんかで會つて話したりした。

私達が三階の東側の海の見ゆる部屋に引移つてからは、同じ階の南角に其家族が居たので、顔を見る機会も多かつた。十二三の娘は黒いリボンをちよん髷のやうに結んで居たので、私共はあのちよん髷がちよん髷がといつて居た。其娘は或日わたくしに日本のスタンプをくれなどいふやうになつた。姉妹中で一番のお轉婆で、毎日タオル入の籃さげて一人で時には小さい妹をつれてさつさと海水浴に出かけ、髪をびしよぬれにして紅い顔にてりながら歸つて來るのをよく見うけた。或夕バラでいろいろ話す時、私共の年を、夫は五十、私は四十を越してる事をいつたら、彼女は小さな肩をゆすつて、両手で自分の兩耳を掩ふまねをしたりした。

老婦人の家族は Jew であつた。

“私達はロンドンに住まつて居ます。随分富むで居ましたけど、今度の戦争がはじまると、夫がやれ献金、やれ慈善、とすつかり財産を投げ出してしまひました。今はエルサレムに來て、夫は毛織物の工場を建て、貧しいものの爲に働いて居ます。長男が濠洲へいつて商賣してるのを見に、子供引つれ出かけるところ、歸りに日本に立寄り、次女を横濱に縁付け、アメリカを経て、ロンドンにかへるつもりです。”など話す。

“今日は終日部屋にこもつて、仕立ものをじました。”小さい二人の娘をさして、“彼着物は今縫ひあげたばかりですよ。”と指さすのを見ると、淡紅色縮みのそろひの服涼しげに、二女は欣欣と

して居る。‘恰好が可愛ゆく出来てますね’とわたくしはほめた。
“随分旅行もしますが、何處へ旅する時でも、大勢の子持ですから、
ミシン携帯です。子供達の着物は、私が手一つで縫ふのです。半ば
はかこち、半ばは誇らしげに。

夫が“妻も始終さうです。針ももてば、洗濯なんかも道と自分で
して居ます。”と話したら、これは話せるといつた風に、自分もけふ
洗濯をしたがなどいつて居た。なる程寝衣がバルコニーに干してあ
つた、とわたくしは思つてきいた。

日本にお嫁にゆくといふ妹娘は、外國婦人向きに仕立てられた
菊の刺繍のごてごてした桃色のきものをきた湯上り姿など見かけた
が、其娘は、わたくしの始終着て居る日本服をほめて、“此着物は洗濯
する事が出来ますか”などきく。わたくしは、お召の單衣を着て居た
ので、流石に手数のかかる、水がかかっても縮みあがる、此着物を
洗へるとはいつたものの、誇らしうは話せなかつた。

又或時はお婆さんは、わたくし達の夫婦そろひの旅行をうらや
ましい事だ、といつて居た。そして夫が小説をかくといふ事をきいて、
自分はこれ迄或は露西亞、或は獨逸、或時は塊地利と随分ひどい目
にあつたりして来たが、自分の生涯をお話したら優に一巻のロオマ
ンスが出来る、お話したいもの、といつて居た。

又或日は、此處のお魚は甘いではありませんかね、などほめて居
た。實際わたくし達も坡西土の魚はおいしいと思ひ、地中海を瀬戸
内海に比して居た。老夫人は“エルサレムではグランドホテルにお

出でしたね、あそこの料理はひどいものでしたでせう”など話し、
自分はマアケツトに近いホテルに居ましたが、あそこはホテルとし
ては小さいけど、料理はエルサレムで一ばんよかつた、といつて居
た。後で思へば、わたくし達がエルサレムのホテルの自室から眺め
て居ると、ある夕、一軒置いて下隣りの平屋根で、女學生かと思ふ娘
達が四五人出て来て、稚子鬘のやうなリボンかけた八つ位の女兒が
十七八のと waltz を踊つて居た。其娘達が即此 Jew の家族であつ
たに違ひない。此家族は魚はたべるが肉は食はぬ菜食家で、マリナ
ホテルの食堂でも、別誂の食事をして居た。バタなどみんな自分でこ
さへるといつて居た。思へば此間のカンタラでバタの甘かつた事、な
る程と、わたくしはうなづいた。わたくしは戦後の此混亂の日に、
六人の子供を引連れて、終始一貫菜食をホテルに於ても實行してゆ
く其意志のつよさに驚かされた。なまなかな根氣では出来ないこ
と。しかも六十に近い婦人の身のこなしといひ、話しぶりといひ、
元氣なのにも感じた。生理上猶太人一人の生命は歐米人二人の生命
に値ひすると云はれて居るが、成程體力にかけても著しい優秀なも
のである。流石に選民の自信で暇へた猶太人は違ふ。老婦人は一ば
ん小さい娘のかしらをなでて、My Queen ですとほこつて居た。惻
怛て、お母さんをよくなぐさむるといふ。エルサレムの屋上で踊つ
た稚子鬘式リボンは、此 Queen であつた。

二週間餘たつて、わたくし達の船がさきに出る事になつた。老婦
人の家族はもう一週間のびた、などいつて、名残を備んだ。わたく

し達の船がホテルの前を地中海へと出る時、三階の南角のバルコニーでは皆此方を見て手巾をふり、十二三のちよん鬢さんは、大きなタオルを両手で、體を二つに折るやうにばたばたとうちふつて居たのが見えて居た。わたくし達も、ハンカチをふつて別れを惜んだ。

あ い

•(四)•

日日見る埃及メエル、ホテルの玄関内に掲示されるロイテル電報は、私共にエルサイエの消息を齎した。講和會議の段落の一呼一吸が、私共に鮮やかに感ぜられた。聯合國がぐいぐい押しつける呼吸、獨逸の溢り加減、それは日から日と傳へられた。私共の心は聯合國側から獨逸側へ、獨逸側から聯合國側へと往つたり來たりした。

到頭六月廿八日が來た。

私共の室の北隣は、行き止まりになつて、其處の室には若い英吉利婦人が居る。南隣には、四十前後の英吉利のカアキイが二人居る。此士官の室に、毎日よくやつて來ては談笑する眼鏡をかけた平服の希臘人かと思はるる四十男が居る。Reuter の社員でもあるか、よく講和會議の經過などを士官に話して居る。早口のひよひよいと雀の躍る様な口を利く人だ。廿八日の夕方不圖隣の話聲が耳に入った。獨逸がいよいよ講和條約に調印したと云ふのである。それか

ら例の早口で、條約の諸項を話して居るが、私にはよく聞取れない。然し要するに、到頭獨逸が我を折つた、而して講和條約に調印しただけは、明白である。

私共は兎に角吻と息を吐いた。

日暮れて食堂に下りる時、揭示場の前には人がたかつて居る。かき分けて覗く。ロイテルの特報で、獨逸がいよいよ條約に調印したと云ふのである。

私は巴里を思ひやつた。大搖籃は五十年ぶりに佛蘭西へ戻つて來たのだ。五十年前佛蘭西が嘗めたものを、今獨逸が嘗めて居るのだ。而してそれは獨逸の爲に好いのだ。勝つ事を知つて負ける事を知らぬ者は、禍ひである。天の父は高ぶる者を憎む。

* * *

六月廿九日は、講和條約調印を祝ふべく、坡西土は全盛飾をした。街は各國旗で飾られ、船と云ふ船は満船艦飾をし、軍人、非軍人、白黒黄の差別なく、皆出來得る限り美裝した。街上を濶歩する佛蘭西の水兵の元氣が、殊に好かつた。小舟に乗つた紫、綠、青などのけばけばしい埃及女の裝も、美しく眼を牽いた。

港口をかためて英吉利の軍艦が一隻、小形の佛蘭西砲艦が一隻、永いこと碇泊して居る。今日は白鼠色の其艦が、橋頭から兩舷に萬國旗を花やかにかざし、橋頭高く Union Jack の旗をそよ吹く風に靡かせて居る。勿論其處には獨逸國旗も、奧地利國旗も、土耳其のも、勃耳俄利亞のも、乃至露西亞のもなかつた。人事の順序は、今其等

の國旗を當然飾らる可き綱の上から、曳き下ろして居るのだ。私はすべての國旗を掲げる日を近きに祈つた。正午十二時になるを相圖に、英吉利の軍艦は祝砲を打ちはじめた。左舷一齊、ついで右舷一齊。左舷、右舷、と交番に祝ひをうつ響は、坡西土の海に陸に轟いた。

それと同時に、坡西土の船と云ふ船は、一時に汽笛を鳴らした、大きな船は太く、小さい船は細く、聲の限りを張り上げて。

* * *

獨逸の講和條約調印をさながらのきつけに、私共を伊太利へ連れて行く船が來た。それは戦争が伊太利の有にしたもと奥地利 Lloyd の船で、会社の事務所も舊のままなれば、船名もまだもとの“Karlsbad”で通つて居る、其船であつた。私共はその船で埃及を後にし、伊太利の長靴の踵に當る Brindisi へ渡らうと謂ふのである。

著作權
所有

日本から日本へ
東の巻

大正十年三月三日印刷
大正十年三月八日發行

著者

徳富健次郎
徳富愛

發行者

東京市日本橋區大傳馬堂町壹番地

金尾種次郎

印刷者

東京市京橋區西組屋町二十七番地

佐久間衡治

印刷所

東京市京橋區西組屋町二十七番地

株式會社秀英舎

正價金五圓
發兌元

東京市日本橋區大傳馬堂町壹番地

特長電話神田四〇九一番 長電話神田二〇七九番

振替東京三八一七番

金尾文淵堂

394

51

終